

九州大学

大学文書館ニュース

第30号

2007. 11. 15

目 次

創立100周年を迎える九大フィルハーモニー・	九州大学大学文書館委員会名簿…………… 7
オーケストラ…………… 2	九州大学大学文書館名簿…………… 7
大阪大学に文書館をつくろう！－セールスマン	受贈図書一覧…………… 7
としての行動宣言－…………… 5	大学文書館日誌抄録…………… 9



「摂政宮殿下御成婚奉祝音楽会」(1924年)

写真は、九大フィルハーモニー・オーケストラが、1924年（大正13）の1月26日に、現在の中央警察署の場所に建っていた福岡市記念館において、時の皇太子（後の昭和天皇）の結婚を祝う「摂政宮殿下御成婚奉祝音楽会」を催したときのものである。この演奏会では、文部省が選定した奉祝歌に加えて、同じ歌詞をベートーヴェンの交響曲第9番の最終楽章に当てはめて演奏がなされている。中央の最前列に立っているのが、九大フィルの創設者で当日の演奏指揮を行った榎保三郎（精神病学教室の初代教授）である。写真から、独唱者の4人は全て女性だったようである。混声合唱には九大工学部、福高、西南学院、福岡師範、中学修猷館、福中、女子師範、福岡高女、筑紫高女、九州高女、福岡女学校など市内の各学校の生徒や教師約180名が参加した。オーケストラ編成は32人であり現在の標準からすると寂しいが、当時とすれば最大規模であった。ベートーヴェンの第9交響曲は、今日では年末を中心にして日本全国で広く演奏がなされるが、この日の演奏が、その第4楽章だけではあるが、日本人によって我が国で響いた最初である。

創立100周年を迎える九大フィルハーモニー・オーケストラ

松 村 晶

九大フィルハーモニー・オーケストラ（九大フィル）は、再来年の2009年（平成21）に創立100周年を迎える。本学の建学100周年が2011年であり、現在その記念事業が進められているが、九大フィルは本学が九州帝国大学として発足するより前の、京都帝国大学福岡医科大学の時代に芽生えている。ここでは、手元にある資料をもとにその歴史を概観する。

1. 榊保三郎博士と九大フィルハーモニー会

九大フィルの歴史や活動については、1963年（昭和38）にその当時の顧問（学友会音楽部長）であった理学部の鳥山隆三教授やOB諸氏らによって「九大フィルハーモニー・オーケストラ50年史」が取り纏められ、その後もそれを補遺する形で10年ごとに発刊された年史に記録されている。これらに依れば、九大フィル（フィルハーモニー会）は、福岡医科大学の精神病学教室の初代教授として1906年（明治39）11月に着任した、榊保三郎博士によって設立された。榊博士はそれまでの3年間をベルリンで過ごしており、留学中も研究の傍らヴァイオリンの研鑽を積むほどの音楽好きで、福岡に赴任してからも有志を集めて演奏を楽しんでいたようである。着任の翌年の12月17日には「獨国楽聖ベートーフェン氏誕生日祝賀音楽会」を催しており、これは福岡で初めての音楽会だったと言われている。九大フィルが創設された時期については諸説があり、正確には明らかでない。しかしそれでも1909年（明治42）が設立年とされているのは、1919年（大正8）11月に行われた第15回秋季演奏会が「創立10周年記念」と銘打たれていることに拠っている。この演奏会の広告文が「50年史」に掲載されているが、既にこのときに部員が30余名に達しており、演奏会は500人もの聴衆を得ていたことなど、興味深い記述が散見される。この演奏会ではまだファゴットやティンパニが欠けていたが、その2年後の1921年（大正10）の第19回演奏会にはこれらも加わり、堂々たる2管編成に整備されている。今日と違って楽器を揃えることは並大抵のことではなく、「50年史」には数々の興味深い逸話が記録されている。

これらの楽器の多くは榊博士が私財を投じて揃えたものであるが、その他に三浦環女史やエフレム・ジンバリスト氏など国内外の著名な演奏家を招聘して音楽会を催し、その収益金が楽器購入にあてられた。1922年（大正11）6月に開かれた三浦環独唱会の記念写真は、本ニュース第26号（2005年12月刊）の表紙を飾ったので記憶に新しい。現存している1925年（大正14）購入のコントラファゴットは、その当時国内唯一であり、NHK交響楽団の前身である新交響楽団の指揮者であった近衛秀麿氏（後の宰相近衛文麿の令弟）が、1年間の貸与を願い出たと伝えられている。

横田庄一郎氏の著書「第九「初めて」物語」に後付されている「明治・大正時代における交響曲演奏記録年表」を見ると、この頃までに登場する団体は、俘虜収容所のドイツ兵オーケストラを除けば、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）の管弦楽団と九大フィルでほとんどが占められている。1922年（大正11）までに九大フィルは、ベートーヴェンの交響曲第1番、第5番「運命」、第6番「田園」、シューベルトの「未完成」、モーツァルトの交響曲第40番、メンデルスゾーンの第4交響曲「イタリア」に加えて、榊教授の独奏でメンデルスゾーン、ブルッフの協奏曲などを演奏している。これらのレパートリーは当時の東京や大阪でも珍しく、その多くは日本初演かあるいは日本人による初めての演奏になる。

中央から遠く離れた筑紫路の一角での活動であったが、これまで述べたことから榊教授と九大フィルの存在は中央の楽壇でも知られていたと容易に想像できる。1923年（大正12）4月には、朝日新聞社等の主催で大阪と東京で各二夜、名古屋で一夜の演奏旅行が企画された。しかし、不運なことに北白川宮成久王が4月1日に自動車事故で急逝したために、一切の演奏会が中止となり、無念な思いで大阪から帰福している。その後、翌1924年（大正13）の1月26日に福岡市記念館で、表紙の写真にある、皇太子（後の昭和天皇）の結婚を祝う「摂政宮殿下御成婚奉祝音楽会」を催し、その中で「ベートーフェン作曲第九交響楽最終楽章中の快速調及び荘厳なる緩徐調に文部省撰奉

祝歌詞を榊保三郎が適応せるものなり」と説明が付けられた「新編奉祝歌（管弦楽附混声合唱）」を演奏している。我が国におけるベートーヴェンの第9交響曲の演奏記録は、1918年（大正7）6月1日に徳島の板東俘虜収容所においてドイツ兵捕虜が行ったとするものが最も古い。一方、日本人による初の全曲演奏は、1924年（大正13）11月29日に東京音楽学校管弦楽団によってなされている。しかし、第4楽章に関しては、シラーの原詩によるものではないが、これより前に九大フィルと福岡市民によって日本人として初めて日本の社会の中で、その「歓喜の歌」を響かせた。これらの第九初演の様子については、前述の横田庄一郎氏の著書が詳しい。

このように榊教授と九大フィルは、明治から大正にかけての洋楽史に確固たる足跡を残した。しかし、1925年（大正14）に入って、医学部教授による病院外での特別診療の疑惑が持ち上がり、榊博士はその年の8月に教授職を辞している。このとき、博士は楽器、楽譜の全てと現金三千円を学友会に寄贈した。こうして九大フィルハーモニー会は、1927年（昭和2）にその幕を閉じ、それに代わって学友会に音楽部が誕生する。榊博士は、九大を去ってから約4年後の1929年（昭和4）3月19日に、肺炎を患って帰らぬ人となった。享年60歳だった。葬儀では山田耕筰の指揮で、「英雄」交響曲の第2楽章と「運命」交響曲が演奏された。これが日本最初の音楽葬だったと「50年史」には記されている。

2. 九大音楽部の活動

榊博士が去った後は、創立期から参加していた工学部の荒川文六教授（後の第6代九大総長）が指揮者となって、引き続き安定した活動を続けている。シューベルトの没後100年にあたる1928年（昭和3）6月の第30回演奏会では、「未完成」交響曲とハ長調交響曲（第8番）他を演奏するほどの充実ぶりである。1933年（昭和8）の第40回演奏会でベートーヴェンの第2交響曲を取りあげ、これで九大フィルはベートーヴェンの全交響曲（ただし、第9番は第4楽章のみ）をレパートリーとした。しかし、昭和が進むにつれて次第に純粋な音楽活動を難しくする情勢が強まっていき、演奏会は音楽部と

して声楽部やマンドリン部と一緒に開かれるようになっていった。この頃はオーケストラとマンドリンの両方を掛け持つ部員が少なくなく、これらは一体であったと見るべきであろう。1941年（昭和16）に入ると時局はいよいよ緊迫し、学友会は興学会に改められた。それでも年2回の定期演奏会は続けられたが、1943年（昭和18）になると学徒出陣が始まり、その年の12月5日に開かれた第61回演奏会でもって戦前の活動に終止符が打たれた。最後に演奏されたのはハイドンの「軍隊」交響曲であった。

3. 戦後の再建から今日へ

戦争によって焦土と化した福岡市であったが、幸いに本学は戦火から逃れていた。1946年（昭和21）秋にマンドリンクラブがいち早く演奏会を再開したのに続いて、翌1947年（昭和22）6月14日に九大コーロステルラ（混声合唱団）が医学部講堂で第1回の演奏会を開催した。九大フィルはそこで戦後初めての演奏を行っている。その後、新たな再出発の指導者として、戦地から復員して西南学院で合唱指揮を始めていた若い石丸寛氏を引っ張り込んで、その年の12月に定期演奏会（第62回）を4年ぶりに開いている。さらに翌1948年（昭和23）5月の演奏会では、第9交響曲の第4楽章を再び取りあげている。ここで唱われたのは、もちろん前回とは違いシラーの詩による「喜びの歌」であった。石丸氏は、九大フィルを復興した後、1951年（昭和26）に本職の指揮者として東京に活動の場を拡げる。同じ年に石丸氏は、九大フ



戦後に活動を再開した頃の九大フィル（第63回定期演奏会。1948年（昭和23）5月29日、30日。於医学部講堂）

この演奏会では、26歳の若い石丸寛氏の指揮によりベートーヴェンの第7交響曲全曲に加えて、第9交響曲の第4楽章が演奏された。独唱者には、戦後の福岡楽壇の重鎮として活躍した森脇憲三氏と安永武一郎氏らが参加していた。オーケストラの中にはその後九大教授となる何人かの若い頃の顔が見られる。

イルやNHK福岡放送局楽団のメンバーらを中心にして、現在の九州交響楽団の前身である福岡交響楽団を結成している。その後の九大フィルの指揮台には、荒谷俊治氏や穴山健氏など九大出身者が立ち、鳥山隆三音楽部長が要となって活動を充実させるとともにその幅を拡げていった。年2回の定期演奏会の他に学内や九州各地での演奏も頻繁に行っている。まだ、現在の九響がない時代である。1953年（昭和28）に荒谷氏らは男声合唱団コールアカデミーを旗揚げ、続いて1961年（昭和36）にはフィルの管楽器部門から独立して、九大吹奏楽団が活動を開始している。1966年（昭和41）には、作曲家の黛敏郎氏が司会をしていたテレビ番組「題名のない音楽会」に、九大フィルは石丸寛氏の指揮で出演して全国に紹介された。そして、1968年（昭和43）7月5、6日の第100回目の定期演奏会において、九大フィルは石丸氏の指揮の下で遂に第9交響曲の全曲演奏を成し遂げている。独唱者には伊藤京子女史ら国内の第一級の声楽家が参加し、福岡の合唱団が総動員された。「60年史」に新聞各紙の論評が載っているが、大成功で尋常ならぬ盛況ぶりだった様子が伝えられている。1973年（昭和48）には、ボストン大学での留学を終えて帰国した本格的ヴァイオリニストの田中令子女史をコンサートマスターに迎えて、大きな話題となった。田中女史はその後福岡大学交響楽団のコンサートマスターにも就任し、福岡の学生オーケストラの発展に大きく貢献した。1975年（昭和50）には齋藤秀雄門下で新進気鋭の堤俊作氏が定期演奏会に初めて登場し、それ以後今日までほぼ毎年演奏会の指揮台に立っている。堤氏が登場してから既に30年が経過しているが、この間、堤氏と荒谷氏に加えて数々のプロの客演指揮者による指導もあって、九州の常設オーケストラとして初めてマーラーの交響曲を演奏するなど数々の大曲にも挑み、75周年にあたる1984年（昭和59）には上海に演奏旅行を行うなどして、活動の質を飛躍的に向上させている。この頃の演奏は20枚ほどのCDになって市販されたが、その中にはマーラーの交響曲第5番やリムスキー・コルサコフの「シェヘラザード」など高い評価を得ているものが少なくない。1998年（平成10）には全日本大学オーケストラ大会で大賞を受賞し、その実力は高く認知されるものとなった。

4. おわりに

このように九大フィルの歴史を見返すと、その

活動は長く福岡・九州の洋楽史の中心にあって、そこから様々な新たな活動が生まれ発展してきたことがわかる。来る2009年（平成21）は、九大フィルのみならず、本学あるいは福岡・九州の音楽活動の100周年と位置づけられてもおかしくない。現在は学生中心で活動しているため、過去の貴重な遺産や資料の管理が難しくなっている。100周年と伊都地区への移転を控えて、大学図書館の協力を仰ぎながら、それらの収集と保管を進めるべく努力を開始したところである。

参考資料：

- 「九大フィルハーモニー・オーケストラ50年史」、九大フィルハーモニー会編、(1963)
 - 「同 60年史」、(1970)
 - 「同 70年史」、(1987)
 - 「同 80年史」、(1989)
 - 「同 90年史」、(1999)
 - 半沢周三著：「光芒の序曲：榊保三郎と九大フィル」、葦書房(2001)
 - 横田庄一郎著：「第九「初めて」物語」、朔北社(2002)
 - 「九州交響楽団50年史」、九州交響楽団編、(2004)
 - 「博学博多 ふくおか深発見」、西日本新聞社編、(2007)
- (九州大学工学研究院教授/九大フィルハーモニー・オーケストラ顧問)

大阪大学に文書館をつくろう！－セールスマンとしての行動宣言－

菅 真 城

2006年7月1日、大阪大学文書館設置準備室（以下、「準備室」と略記）が設置されました。準備室は、「大阪大学の歴史に関する文書（法人文書を含む。以下同じ。）の収集、整理、保存及び公開を目的とする文書館の設置準備を行うため」（大阪大学文書館設置準備室設置要項第1）の組織です。室長には、総長指名により経済学研究科の阿部武司教授が就任しました。10月1日には、専任教員として筆者が、事務補佐員として田村綾が着任し、11月1日付で同じく事務補佐員として辻義浩が着任しました（事務補佐員はいずれも週30時間勤務）。上記のスタッフで、文書館設置にむけた準備業務を行っています。準備室に関する事務は、事務局関係部課及び関係部局事務部の協力を得て、総務部企画推進課が行っています。

大阪大学に文書館を設置することを検討するにあたっては、文書館（仮称）設置検討ワーキング（主査は阿部武司教授）が設置され、2005年1月7日の第1回ワーキング以来、検討を重ねてきました（現在までに13回開催）。ワーキングは総合計画室にあてて二度にわたって答申を提出し、2006年2月10日付の「大阪大学文書館（仮称）設置第二次答申」は3月15日の教育研究評議会で報告されました。こうして次期中期計画が始まる平成22年度の文書館開設をめざしての動きが始まったのです。

この大阪大学における文書館設置にむけての動きの中で注目されるのは、年史編纂とは無関係に文書館設置が計画されたことです。これまでの日本の大学アーカイブズは年史編纂と密接にかかわって設立されてきました。国立大学をみても、年史編纂とアーカイブズ業務を並行して実施した広島大学の事例は存在しますが、その他の旧制帝国大学のアーカイブズはいずれも年史編纂完了後の資料保存をきっかけに設立されてきました。大阪大学に文書館が設置されると旧帝大7大学にアーカイブズが揃いますが、大阪大学文書館はその設立経緯と目的とに照らして、個性的な活動をしていく必要があるでしょう。また、アーカイブズと

は何か、大学アーカイブズとは何かを問う場ともなるでしょう。大阪大学における文書館設置の動きが他大学に波及していけば、望外の幸せです。

先程、大阪大学における文書館設置の動きは年史編纂とは無関係と述べましたが、厳密に言うと年史編纂の遺産を継承しています。大阪大学ではかつて大阪大学五十年史編纂事業が行われ、『写真集 大阪大学の五十年』（1981年）、『大阪大学五十年史 部局史』（1983年）、『大阪大学五十年史 通史』（1985年）の3冊の書籍を刊行しました。また、『大阪大学史紀要』を第4号まで刊行しましたが、発行主体である五十年史資料・編集室の廃止にともない廃刊となりました。この五十年史編纂資料が現在附属図書館の貴重書庫に保管されており、準備室ではまずこの資料の再整理に着手しました。五十年史編纂関係者は、編纂完了後大学資料館あるいは大学史資料センター設置を熱望していましたが、四半世紀を経てようやくそれが実現しようとしています。

当準備室では、（1）大阪大学の法人文書、（2）大阪大学の歴史に関する資料の収集・整理・保存を実施する予定ですが、資料の保管のためのスペース不足に悩んでいます。現在はサイバーメディアセンターのご厚意により教員室2室を借用していますが、すでに書架は満杯の状態です。大阪大学の歴史に関する資料としては、先述した五十年史編纂資料のほか、名誉教授数名から資料の寄贈を受けました。この他学内外の機関から刊行物等を寄贈していただいています。これまでの収集資料数は約9400点（五十年史編纂資料は除く）です。

法人文書については、保存スペースがないことにあわせて情報公開法上の問題から、現在のところ文書の収集は行っておらず、事務局での法人文書の所蔵状況を調査するに止まっています。幸い事務局の方のご理解を得て、保存年限が10年以上の文書の廃棄は、準備室が発足する以前の平成17年度から停止していただいています。

大阪大学文書館が成功するか否かの鍵は、いか

に法人文書の収集・整理・保存・公開が出来るかにかかっているとんでも過言ではないでしょう。決して法人文書以外の歴史的資料を軽視しているわけではありませんが、やはり法人文書がアーカイブズの中核資料です。アーカイブズのユーザーは、研究者や一般市民など多様ですが、最大のユーザーは事務職員の方々でしょう。親組織の事務職員にとって役に立たないアーカイブズは、アーカイブズとしての価値が半減しているといっても差し支えないでしょう。

沖縄県公文書館の富永一也氏は、自らを営業マン、公文書を引渡してもらうための働きかけを営業活動と位置づけ、新規顧客の開拓（これまで引渡し実績のなかった部署から公文書の引渡しを受ける）に成功されました（富永一也『何かお困りのことはありませんか』～アーカイブズ文書引渡しの現場から『緑丘アーカイブズ』5、2007年）。さしずめ筆者は、大阪大学唯一人の文書管理や文書館についてのセールスマンです。文書館を設置して文書管理システムを確立することが、ユーザーである事務職員の方々にとっていかに便利で役立つかについて、地道に営業活動していきましょう。時には派手なアドバルーンもあげながら。

また、「川の上流（現用文書）の管理が適切でなければ、川の下流（公文書館）にきれいな水が流れてくるはずがありません」。そこで富永氏は、現用文書管理からお手伝いすることにされたそうです（前掲富永論文）。大阪大学の法人文書は、独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律に基づいて適切に管理されているはずですが、アーカイブズの視点を入れることにより現用文書の管理がよりよく改善されるのならば、事務職員の方々と協力して取り組んでいきたいと思えます。法人文書は大学の業務遂行のために作成されるものですが、国民共通の財産でもあります。文書館を設置して大学の情報をより広く一般に公開・開示していくことが出来れば、ひいては大阪大学の社会における信頼やネームバリューの拡大にも繋がっていくことでしょう。

大阪大学は豊中・吹田の両地区にキャンパスが分かれていましたが、2007年10月に大阪外国語大学と統合して箕面地区も含めて3キャンパスになりました（この他に大阪市内に中之島センターが存在しています）。事務局が吹田地区にあるのに



大阪大学文書館設置準備室事務局

対して、準備室は豊中地区に置かれています。また、大阪大学の文書主管課は評価・広報課であり、準備室の事務を担当している企画推進課ではありません。これらのことは、準備室と事務局との日常的なコミュニケーションの支障となります。しかし、電子メール等の通信手段が発展している現代です。セールスマンである筆者は、最大の顧客である事務職員の方々に常に呼びかけていきましょう。いや、文明の利器に頼らず、自ら足を運んで汗をかきましょう。「文書管理で何かお困りのことはありませんか？」と。そして文書館という素晴らしい商品を売り込みましょう。「目指せ！トップセールスマン」です。

〔大阪大学文書館設置準備室ウェブサイト〕

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/facilities/archives/top.html>

（大阪大学文書館設置準備室講師）

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	理事	副学長	有川 節夫	委員	比文教授	吉田 昌彦
委員	人環院	教授	新谷 恭明	〃	言文准教授	高橋 勤
〃	文書館	教授	折田 悦郎	〃	総理工准教授	高曾 徹
〃	人文院	准教授	山口 輝臣	〃	応力研准教授	山本 勝
〃	経院	准教授	北澤 満	〃	産連七教授	湯本 長伯
〃	理院	准教授	鹿島 薫	〃	博物館館長	多田内 修
〃	工学院	准教授	水永 秀樹	〃	総務部部長	松本 次好
〃	芸工院	准教授	大島 久雄	〃	図書館部長	濱崎 修一
〃	薬院	准教授	濱瀬 健司			
〃	生医研	教授	中山 敬一			

(2007年10月31日現在)

九州大学大学文書館名簿

館長	理事	副学長	有川 節夫	兼任事務職員	総務課長	大土井 智
副館長	人環院	教授	新谷 恭明	〃	法令審議室長	百崎 義隆
専任教員		教授	折田 悦郎	〃	総務第二係長	山下 和成
兼任教員	人文院	教授	佐伯 弘次	事務職員		山中 一男
〃	法学院	教授	植田 信廣	事務補佐員		松尾 陳代
〃	法学院	教授	熊野 直樹	〃		筑紫 啓子
〃	比文院	教授	有馬 學			

(2007年10月31日現在)

受贈図書一覧 (2007年1月～2007年6月)

学士鍋 第141号～第142号	九州大学医学部同窓会	2006.12、2007.3	小樽商科大学百年史編纂室	2007.3
甲寅会誌 第41号～第50号	甲寅会	1959.4～1975.8	東北大学史料館紀要 第2号	東北大学学術資源研究公開センター史料館
乙酉会会報 第1号～第18号	乙酉会	1989.11～2006.12	東北大学史料館だより No.6	東北大学学術資源研究公開センター史料館
謝恩 楠先生の想出 昭和三十二年	第二内科同門会	[1956]	東京大学史紀要 第25号	2007.3
吾 第六十号～第八十一号	九州大学造船会「吾」委員会	1985.1～2006.1	東京大学史史料室	2007.3
九州大学歯学部同窓会東京支部『東風会』会報 第7号	九州大学歯学部同窓会東京支部『東風会』	2007.6	東京大学史史料室ニュース 第38号	2007.3
北海道大学大学文書館年報 第2号	北海道大学大学文書館	2007.3	東京大学史史料室	2007.3
緑丘アーカイブズ 第5号	小樽商科大学百年史編纂室	2007.3	金沢大学資料館だより No.28～No.29	金沢大学資料館
小樽商科大学史紀要 創刊号			2006.12、2007.3	四高開学120周年記念展示 学都金沢と第四高等学校の軌跡
			金沢大学資料館・金沢大学附属図書館	2006.10
			京都大学大学文書館研究紀要 第5号	
			京都大学大学文書館	2007.1
			京都大学大学文書館だより 第12号	
			京都大学大学文書館	2007.4

平成一六・一七年度総長裁量経費プロジェクト 京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書第二卷		龍谷大学史報 Vol. 7	
京都大学大学文書館	2006. 3	龍谷大学大学史資料室	2007. 3
名古屋大学大学文書資料室紀要 第十五号		関西学院史紀要 第十三号	
名古屋大学大学文書資料室	2007. 3	関西学院学院史編纂室	2007. 3
名古屋大学大学文書資料室ニュース 第21号～第22号		神戸大学史紀要 第7号	
名古屋大学大学文書資料室	2006. 9、2007. 3	神戸大学百年史編集委員会	2007. 3
名古屋大学大学文書資料室保存資料目録 第7集		神奈川大学会議録(八) 神奈川大学史資料集 第二十三集	
名古屋大学大学文書資料室	2007. 3	大学資料編纂室	2007. 3
大学論集 第38集		立命館百年史紀要 第十五号	
広島大学高等教育研究開発センター	2007. 3	立命館百年史編纂室	2007. 3
大正デモクラシーと東北学院—杉山元治郎と鈴木義男—		玉川大学教育博物館館報 第4号	
東北学院資料室運営委員会「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会	2006.10	玉川大学教育博物館	2007. 3
駒大史ブックレット6「図書館誌」にみる駒大図書館史【その2】		成蹊学園史料館資料集3 成蹊学園年表(稿本1) 1944(昭和19)年以前	
駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室	2007. 3	成蹊学園史料館	2007. 3
近代日本研究 第二十三卷		関東学院学院史資料室ニュース・レター 第10号	
慶應義塾福沢研究センター	2007. 3	関東学院学院史資料室	2007. 4
大東文化歴史資料館だより 創刊号～第2号		校史 Vol.19	
大東文化歴史資料館	2007. 1、2007. 5	國學院大學校史資料課	2007. 3
龔誌 創刊号		真宗総合研究所研究紀要 第24号	
日本大学資料館設置準備室	2005. 8	大谷大学真宗総合研究所	2007. 3
成瀬記念館 No.21		武蔵野美術大学大学史史料集 第五集 『金原省吾日記』 昭和九年	
日本女子大学成瀬記念館	2007. 1	武蔵野美術大学大学史史料室	2007. 5
日本女子大学史資料集 第11—(1)東京都公文書館所蔵 日本女子大学関係史料〔1900年～1916年〕		新しい歌をうたおう 神戸女学院大学音楽学部 100年の歩み	
日本女子大学成瀬記念館	2007. 3	神戸女学院大学音楽学部100年史編集委員会	2007. 3
武蔵学園史年報 第十二号		桃山学院年史紀要 第二十六号	
武蔵学園記念室	2006.12	桃山学院史料室	2007. 3
大学史資料センター事務室報告 第28集		西南学院史紀要 Vol. 2	
明治大学史資料センター事務室	2007. 3	西南学院百年史編纂準備委員会	2007. 5
大学史紀要 第十一号		皇學館大學所蔵 大学史目録(増訂版)	
明治大学史資料センター	2007. 3	皇學館館史編纂室	2007. 3
立教大学の歴史		アーカイブズ 第28号	
立教大学立教学院史資料センター	2007. 1	国立公文書館	2007. 4
大学教育研究フォーラム 第12号		国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇 第3号	
立教大学全学共通カリキュラム運営センター	2007. 3	国文学研究資料館	2007. 3
早稲田大学史記要 第三十八卷		アーカイブズ・ニュースレター No. 6	
早稲田大学大学史資料センター	2007. 3	国文学研究資料館	2007. 3
アルケイアー記録・情報・歴史— 第1号		記録と史料 第17号	
南山大学史料室	2007. 3	全国歴史資料保存利用機関連絡協議会	2007. 3
		大学アーカイヴズ No.36	
		全国大学史資料協議会東日本部会	2007. 3
		記念館だより 第41号～第42号	

大学文書館日誌抄録 (2007年1月～2007年6月)

1. 9 (火) 施設部施設整備課より資料調査のため来館 (～13日、1月15日、2月15日も同様)。
1. 11 (木) 九州大学韓国研究センターより資料調査のため来館。
1. 15 (月) 大学院人文科学研究院特任助手、資料調査のため来館 (1月31日、2月15日、16日、19日、3月22日、6月13日も同様)。
1. 16 (火) 菊池稔夫氏より資料寄贈。
1. 19 (金) 文学部美学・美術史研究室、東京文化財研究所より資料調査のため来館 (3月6日も同様)。
1. 22 (月) 西日本新聞社記者、取材のため来館 (福岡医科大学、九州帝国大学の件)。
1. 31 (水) 文学部西洋史学研究室卒業生、資料調査のため来館。
第26回文化財ワーキンググループ開催 (折田悦郎教授出席)。
2. 2 (金) 総務部総務課広報担当より学生歌の件につき照会、回答 (2月19日も同様)。
2. 5 (月) 理学部等事務部企画係より資料調査のため来館。
2. 7 (水) 折田教授、資料調査のため京都大学大学文書館を訪問 (～9日)。
2. 15 (木) 国立情報学研究所助手、大学文書館視察のため来館。
2. 19 (月) 築山節夫氏ご遺族より資料寄贈。
2. 23 (金) 国立教育政策研究所名誉所員、資料調査のため来館。
2. 27 (火) 国立公文書館より九州大学大学文書館の件につき照会、回答。
2. 28 (水) 九州大学百周年記念事業推進会設立発起人及び設立総会開催 (新谷恭明教授、折田教授列席)。
3. 5 (月) 西日本新聞社より電話取材 (福岡医科大学設置の件)。
3. 6 (火) 吉川幸作氏より資料寄贈。
菱田唯藏元九州帝国大学工科大学教授ご遺族、資料調査のため来館。
企画部統合移転推進室より九州大学創設の歴史の件につき照会、回答。
林崎价男氏より資料寄贈。
3. 12 (月) 旧制福岡高等学校同窓会 (青陵会) より資料寄贈。
3. 16 (金) 立教大学全学共通カリキュラム事務室等より大学文書館視察のため来館。
3. 20 (火) 福岡工業大学教授、大学文書館視察及び資料調査のため来館。
3. 23 (金) 折田教授、「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」研究会に参加 (～25日。於京都大学大学文書館)。
3. 28 (水) 奈良女子大学教授、資料調査のため来館。
3. 29 (木) 文学部日本史研究室より資料寄贈。
3. 31 (土) 『九州大学大学史料叢書』第15輯、『九州大学大学文書館ニュース』第29号、『伊東祐彦関係資料目録』刊行。
4. 3 (火) 江頭和彦大学院農学研究院教授より資料寄贈 (4月12日も同様)。
4. 11 (水) 「大学とはなにか—九州大学を通じて考える—」(総合科目) 開講。
4. 16 (月) 九大フィルハーモニー・オーケストラOB、部史編集の件につき調査のため来館。
4. 19 (木) 福岡県立大学副学長、大学文書館視察及び資料調査のため来館。
4. 20 (金) 学務部キャリアサポート室より資料移管。
4. 25 (水) 第5回九州大学大学文書館委員会開催。
九州工業大学附属図書館史料室より山川健次郎関係資料の件につき照会、回答。

4. 27 (金) 学校法人福原学園より年史編集の件につき調査のため来館。
5. 9 (水) 二宮孝富大分大学教授より資料寄贈。
5. 10 (木) 小泉直彦氏来館、資料寄贈。
工学部等事務部総務課より資料受領。
5. 11 (金) 久留米大学文学部学生 (18名、ほか引率者2名)、大学文書館視察のため来館 (折田教授、九州大学の歴史等につき説明)。
5. 15 (火) 島本精道氏来館、資料寄贈 (31日も同様)。
5. 18 (金) 西日本新聞社より電話取材 (九大「紛争」の件。31日も同様)。
折田教授、日本教育史研究会サマー・セミナー打ち合わせ会に参加 (~19日。於 (UNITY) 神戸・学園都市)。
5. 22 (火) 九大病院検査部より資料調査のため来館。
西日本新聞社記者、取材のため来館 (九大「紛争」の件)。
5. 25 (金) 朝日新聞社記者、取材のため来館 (九大「紛争」の件)。
5. 30 (水) 後藤浩二工学研究院准教授より資料寄贈。
6. 2 (土) 新谷教授、折田教授、「「紛争」期の九州大学史を考えるシンポジウム」に参加。
6. 4 (月) 第2回九州大学百年史編集ワーキンググループ開催 (新谷教授、折田教授出席)。
和田充子氏より資料寄贈。
6. 5 (火) 楠本和義氏より資料寄贈。
6. 6 (水) 原稔氏より資料寄贈。
6. 8 (金) 金沢大学資料館より大学文書館視察のため来館。
6. 11 (月) 大学院人文科学研究院インド哲学史研究室より資料寄贈。
原明義氏より資料寄贈。
6. 13 (水) 朝日新聞社より電話取材 (旧法文学部本館の件)。
6. 18 (月) 佐賀県巖木町史編纂室より資料調査のため来館。
6. 19 (火) 西日本新聞社より電話取材 (郭沫若の件)。
6. 20 (水) 工学部機械航空工学科より資料寄贈。
6. 28 (木) 東京学芸大学教授、資料調査のため来館。

— 後 記 —

九州大学大学文書館ニュースも本号で30号となりました。今回は工学研究院教授で九大フィルハーモニー・オーケストラ顧問の松村晶先生と大阪大学文書館設置準備室の菅真城先生からご論稿を頂き、松村先生には表紙写真の説明文もご執筆頂きました。両先生に感謝申し上げます。また、九州大学大学文書館は、本年10月、従来の旧法文学部本館 (旧研究所) より工学部本館の1階に学内移転し、現在、資料の整理や再配架に努めております。閲覧業務等でしばらくご迷惑をお掛け致しますが、今後ともご支援の程、宜しくお願い申し上げます。なお、移転にともないFax番号が092-642-7646に変わりました。電話番号は旧来の092-642-2292です。

九州大学大学文書館ニュース 第30号

発行日 2007年11月15日 (年2回刊)

編集行 九州大学大学文書館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
Tel:092-642-2292 Fax:092-642-7646

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷